

表面も磨滅して、乳頭なども見えなくなつたものである。然し、よくさがしてみると、割合大きい乳頭が澤山あつて、外面は Dixon の云うように “alte lamellati” ではない。内蒴齒の歯突起は存在し、ツヤゴケ属のものとかわつていない。更に葉のつき方、葉形、葉細胞、中肋等の性状はツヤゴケ属のものの範疇に入るものなので、*Cymbifoliella* 属はツヤゴケ属 (*Entodon*) の synonym になる。そして *C. Sasackae* の學名をつけられた蘿は實は、邦内に廣く分布して、普通にある *Entodon Challengeri* Par. に同定されるべきものであることを知つた。

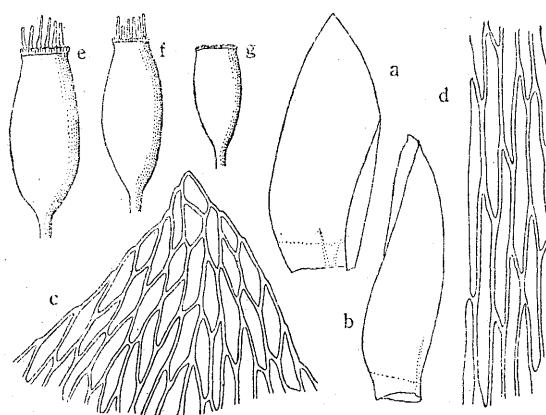


Fig. 2, *Entodon Challengeri* Par. (Typus of *Cymbifoliella Sasackae* Dix.) a, b, Branch-leaves, $\times 28$.
c. Apex of leaf, $\times 294$. d. Cells from middle of leaf, $\times 294$. e, f, g. Old capsules, $\times 13$.

ので 3mm, 蕊胞の大きさは大きい方で 1.8×0.7 mm, 特別に小さいもので 1×0.45 mm である。

Entodon Challengeri Par.

Cymbifoliella Sasackae
Dix. in Journ. of Bot.
(1936) : 8, pl. 610, f. 8
—syn. nov.

Hab. Honshu : prov.
Rikuzen, Sendai-city.
(leg M. Yano, not H.
Sasaoka, no. 5225-typus,
May 15, 1920).

因に上に述べた標本の子
囊體の大きさには變異があ
つて、蒴柄の長さは、長い
方で 8mm, 特別に短いも

○ミヅスギ產地についての追記 (久内清孝) Kiyotaka HISUCHI : Additions to the localities of *Lycopodium cernuum*.

本誌 26 卷 8 號にミヅスギの產地について一言したが、あの記事中に「内地」とあるは「同地」の誤植である。すなはち鎌倉で見つからないという意味である。其後聞知したところでは府川勝藏氏は本年伊豆宇佐美村の阿原田と峯のあいだで温泉の湧出しない地域で採られた由、この地は相當あたゝかいので、生育して居るものと考へられる。